

26期生の皆様—15

近頃はかなり日も長くなり、梅の枝につぼみが膨らんでいるのを見ていると春の足音が聞こえてきます。まだまだ寒さが続くでしょうから、最後まで体調に気をつけて有終の美を飾って下さい。

2月になって通信を出せずにいることを気にかけております。君たちにはどうしても良いことかも知れませんが……。この通信は、将来人生について深く考える機会があれば、その時のために聖書とキリスト教の教えが馬鹿げたものではなく参考にする価値があると思いついてもらいたいと、書いています。今は内容が多少難しいので頭がこんがらがらるかも知れないし、また受験で忙しいので、読む必要はありませんが、ファイルしていつか読んでもらえれば嬉しいです。

さて、今までずっと福音書の歴史性の問題を見てきましたが、そのまとめとして、では福音書は何を伝えたかったのか、について見てみたいと思います。福音書は「エバンゲリオン」すなわち「良いたより」という意味ですが、「何が良い便りなのか」という問題です。

福音書でその言行が語られているイエスは、おそらく紀元28年から30年春までの2年あまりにわたって主に現在のイスラエル北部にあるガリラヤ地方で宣教をした。その教えは神と人間の生き方についてで、神の愛、永遠の命、苦しみや貧しさの意味などを教えました。そしてなによりも「神の国は近づいた」と言い、自分は旧約時代に預言者たちによって告げられたメシア（油を注がれた者）であると暗示します。



しかし、問題はメシアは何をもたらしに来たのか、ということです。つまり「メシアが来たのはいいけど、なにをしてくれるんや」という問いです。多くのユダヤ人はメシアが到来すれば、驚くような変化が起こると期待していました。何度かユダヤ人はイエスに向かって「あなたがメシアであると言うなら、どんなしるしを見せてくれますか」と奇跡を要求しています（マテオ、16、1など）。あるいは、「私は命のパンである。私のもとに来る者は決して飢えることはない」というイエスに対し、「主よ、そのパンをいつも私たちに下さい」（ヨハネ、6、34~35）。つまり一言で言うと、この世での利益や楽な暮らしを求めたのです。しかし、イエスはそのような要求をいつも断りました。つまり、人々が諸手を挙げて喝采するような派手な業をすることを拒んだのです。

そこで前教皇ベネディクト16世はこう問われます。「もしイエスが世界の平和、すべての人のための豊かな生活、より良い世界をもたらすのでないとしたら、イエスは一体何をもたらしたのですか」と。そしてこう答えます。「答えはまったく簡単です。神です。彼は神をもたらしたのです。……イエスは神をもたらし、それによって私たちがどこから来てどこへ行くのかについての真理をもたらしました。彼は信仰と希望と愛をもたらしました」と。ただし「私たちの心が硬いために、私たちはそれでは少ない、何の役にも立たないと考えるのです」（『ナザレのイエス』、71~72）。

でも、もしイエスが単に神について話し人々が互いに愛し合うように勧めただけなら、最後に十字架刑で死ぬことはなかったでしょう。そのような悲劇的最後を迎えたのは、彼が当時のユダヤ人社会に大きな衝撃を与えたからです。

イエスの教えは、当時のユダヤ教で支配的だったファリサイ派の教えと基本的には一致していました。しかし、その教え方が異なっていました。なによりも「律法学者のようではなく、権威ある者のように教えた」ことが民衆の心を打ったようです。「知っての通り、昔の人は〈殺すな〉と教えられた。しかし私は言う」（マテオ、5、21）と言うのですが、これは「ユダヤ教最大の預言者モーセはこう言っている

が、私はこう言う」と自分をモーセと同じかそれ以上のレベルに置いていることになります。あるいは「人の子（イエスが自分を指すとき使う言葉）は安息日の主である」（マテオ、12、8）という発言は普通なら恐れ多くて口に出せないものです。さらに、「アブラハムが存在する前に、私は存在する」（ヨハネ、8、58）とか、安息日に病人を治したことを非難するユダヤ人に対して「私の父（神のこと）は今も働かれるのだから、私も働く」と言った言葉は、自分を神あるいは神と同等の存在にするもので、ユダヤ人にとっては最悪の冒瀆罪になる言葉でした。

このイエスの態度に対して、またそのイエスが民衆の人気を博していくのを見て、ファリサイ派とサドカイ派の人々は反感を募らせました。彼らは、イエスに自分がメシアであるとはっきりと宣言させようと（宣言すれば訴える理由が見つかるので）しましたが、イエスはその手にはかかりません。あいまいな答えでするりと逃げてしまいます。

しかし、大祭司の裁判で初めて公の場ではっきりと宣言します。「大祭司は再びイエスに尋ねた。『あなたはほむべき者（神のこと。ユダヤ人は神の名前を直接呼ぶことを控えて「いと高き者、万軍の主」などと呼びました）の子、メシアか』。イエスは言われた。「その通りである。……」。すると大祭司は衣を引き裂いて（とんでもないこと言語道断なことを聞いたときにユダヤ人がする動作）言った。『どうしてこれ以上証人の必要があろう。あなたがたは冒瀆の言葉を聞いた。これをどう思うか』一同はイエスが死に値する者であると判決した」（マルコ、14、62~64）。

イエスはその尋問に答えれば冒瀆罪で死刑になると知っていながらはっきり答えました。その結果、死刑が宣告されます。しかし、当時ユダヤ人はローマ帝国の支配下にあったので、自分たちだけでは死刑を実行できませんでした。そこで、ローマ総督に訴えます。だが、「この男は自分を神だと言いました」とローマ総督に訴えても、「おまえらの宗教問題はわしらは興味がない」と門前払いを食うことは目に見えていたので、「この男は自分を王と名乗って、ローマ帝国に反対するよう人々を扇動した」と訴えます。つまりイエスを政治犯にしたのです。総督はポンシオ・ピラト（26～36年にユダヤ総督）という人で、この訴えが真実でないことを見抜きますが、「この男を赦すなら、あなたは皇帝の友ではない」（つまり、ローマ皇帝に反逆者を赦したとって訴えるぞ）という脅迫に屈して十字架刑の判決を下します。

110年頃ローマの歴史を書いたタキトゥスという人は、キリスト教「の呼び名の起因となったクレストゥスなる者は、ティベリウスの治世下に元首属吏ポンティウス・ピラトゥスによって処刑されていた」と書いています。2世紀後半のユスティヌスという人は、この裁判についてピラトの報告書があると言っています（今はありませんが）。またユダヤ人の『タルムード』と呼ばれる古い書物にも、「過越祭りの前夜、イエスは吊るされた（十字架につけられた、の意味）」と言い、その理由は「この男は魔術を行い、イスラエルを忌まわしい道に引き込み、今も誘導している罪で訴えられた」と説明しています。つまり、イエスがユダヤ人社会を動揺させた人物であって最後に十字架刑に処せられたことは歴史的事実として疑えないことと言えます。



しかし、問題はその後起こったことです。もしこれで終わりならば、キリスト教は生まれなかったでしょう。聖書によれば、弟子たちはイエスが十字架に処せられたときユダヤ人を恐れて隠れていたのです。なかには早速日曜日に故郷に向かってエルサレムを離れようとしていた人もいました。

では何が起こったのか。それが復活ですが、それについては次回、最後の機会に。